
ルリの百三十三枚の記憶

キラ・イズミ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ルリの百三十三枚の記憶

【Nコード】

N2025L

【作者名】

キラ・イズミ

【あらすじ】

人生がつまらないものだと思っていた少年、管崎春人。原因不明の記憶障害を負っているが、人生を懸命に楽しもうとする少女、皇城ルリ。

真逆の二人はいつしか出会い、人生のキャンバスを描いてゆく。

最後のプロローグ（前書き）

気分屋ですので、更新が遅くなったりします。

誤字、脱字はお許しください。

最後のプロローグ

永遠に続いていそうな画廊を俺は一人で歩いていた。両側の白い壁に掛かった絵を眺めながら。

始めの一枚は、A3の画用紙にクレヨンで大きく桜の木が書かれている。太く、茶色の立派な幹があり、段々と細くなってゆく枝の至る所に着飾るように薄い桃色の花卉が威勢良く、しかし淑やかに花開いている。

これは、始まりを象徴するものだ。

二枚目は、梅の木。三枚目は、椿。四枚、五枚、六枚と続くうちにクレヨンで描かれたまだ幼い絵は、色鉛筆へと変化した。更に枚数を重ねると絵具となり、更に重ねると油絵など、自分の描きたいものに応じて、絵の用法や画材を変えていくようになっていった。

これが、彼女の人生。

彼女は、美しいと思ったものは全て絵にした。写真ではダメだ。「絵」ではないと。自分の見たものが現れる「絵」でないと。

俺は、右手に持っているキャンバスに目を下した。これが、最後の絵。

いつの間にか、俺は画廊の終点についていた。そこに、俺の絵を飾る。

白銀の雪の世界、そこで笑顔で舞い踊る一人の少女、ルリ。

俺の人生を描いてくれた存在。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2025/>

ルリの百三十三枚の記憶

2011年1月15日20時44分発行